

## 西崎先生を送る

橋 川 健 竜

想像を絶する数に上るだろう全国のテレビ視聴者の前に立ち続け、発言すべきことはさりげなく、しかし時を逃さずに発言すること。加えて、これまた膨大な数の新聞読者に向けて、一気に読みきれて一度でわかる文章で、魅力を伝えるように新刊書の書評を書き続けること。さらに、日本の地域研究、ひいては文系の学術全体を包括して、その意義を学界の外に訴える作業。そして、頻繁にかかる学内からの依頼に応じて、時には文字どおり立錫の余地のない会場で、一日未満の単位で刻々と変わる現下の問題について講演すること。いずれも、世間が大学教員に期待する事柄にあたるし、大学教員の誰しも、その価値は認めるだろう。だがそれらは全員がやりたいと思う仕事でも、できる仕事でもない。

これらをすべて引き受けてこられた西崎先生の胆力について、それを支える初心の学問的志について、また日々の研鑽と蓄積について、他の方々は語ることだろう。不肖の同僚でしかなく、それらには表層的・断片的に触れることしかできない私も、常に真摯に目の前の議論に向き合い、しかし自分の問いを大事にする、という姿勢を西崎先生が貫かれていることは、強く感じてきた。

それに最初に印象付けられたのは、先生が駒場に着任されるよりも前、日本のアメリカ学会設立四〇周年記念シンポジウムが名古屋で開かれたときだった（私も前任校にいたときのことである）。発表と討論の流れの中で、パネリストの間で、日系移民研究、日米関係研究など、日本からアメリカを見る研究法こそ、日本で研究する学会の個性として重視すべきである、という議論が優勢になりかけた。そのとき先生は間髪を入れず、日本を絡めた研究の価値は認めるが、アメリカ学会はそれだけをする学会であるべきではない、ほかの課題を追う自由を認めることも学会の責務だろう、という趣旨の発言をされた。それは、同学会の隅っこで足場を探してみるものの吹きつける風は冷たく厳しく、縁から転落していくのではという不安を時折覚えていた私にとっては、鮮やかな一言だった。その後さまざまなめぐり合わせを経て、先生が駒場に赴任してくださることが決まったときは、大変心強い思いを覚えたことを記憶している。

だがお迎えした先生に、あまりにたくさんの仕事をご担当いただいてしまったことを、私は反省しないわけにいかない。先生はたくさんの学内の講演活動を手がけられたほか、

専攻会議では、広くことを見渡す見地から積極的に発言された。また副専攻長を2年務められ、専攻事務室で大小さまざまな学務を担当された。そのことは、そして執行部の学務が多岐にわたり、それを足し合わせると多大なエネルギーを必要とすることは、専攻メンバーの皆さんには周知のことだと思う。

さらに先生は、専攻の外でも多くの仕事をしてこられた。GSPの運営にもかかわられ、後期課程北米コースでも年度最優秀の卒業論文を指導された。先生がアメリカ太平洋地域研究センター（CPAS）とグローバル地域研究機構（IAGS）の両方の長をしてこられたことにも触れたい。CPASは小規模組織なので、持ち上がる諸問題に対し、所属教員全員が知恵を結集しなければならない。着任以来、西崎先生がそれらの諸問題について、全員で議論して答えを出すというスタンスを堅持して、穏やかな口調で真摯にまた建設的に議論し、さまざまな案を出し、作業も手がけてくださったことは、光を見る思いがした。そして、オーストラリア研究客員教授の受け入れ、駒場とANUの学術交流事業、前身組織から数えて設立50周年の記念シンポジウムと、先生のご尽力があってこそスムーズに動かしえた活動がいかに多いことか。だが、こうした数多くの業務は先生にとって、どれほどのご負担であっただろう。自分の非力を申しわけなく思うばかりである。

先生が駒場を離れられることは、打撃という言葉ではすまない事態である。専門が違うだけでなく、そもそも器も小さい私には、先生の在任期間中のご活躍のあり方を目の片隅に残し、その光に照らして文字どおりに自分がいかに小さいかを噛み締めることしかできない。せめて、何らかのかたちで駒場のアメリカ研究の役にたてるよう、努力していきたいと思う。西崎先生は今回、けっして研究者・教員を引退されるわけではないから、4月以降も新天地で、その深みのある外交思想研究によって有為の学生たちを触発し、導いていかれるだろう。また各種メディアで、学会で、学術会議で、その他の場で、駒場の私たちに刺激を下さるものと思う。春からの通勤はやや大変だろうと思われるけれど、先生がお体を大事にされて、今後ともご活躍されることを、切にお祈りしたい。先生、やや短い期間となったことは残念ですが、ありがとうございました。